

秋の流れと紅葉の絨毯(タワ尾根)

秋も終わり寒い冬の季節となりました。

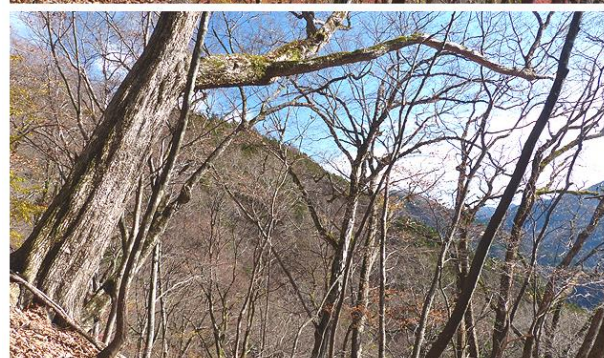
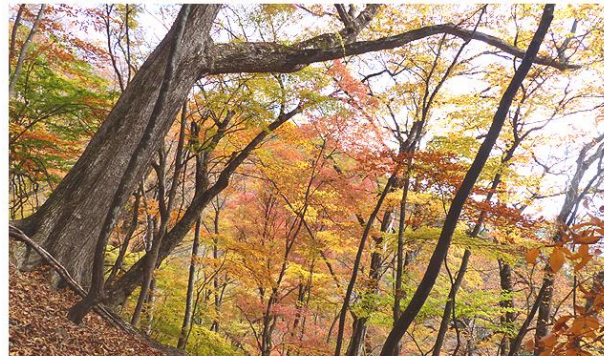
さて、昨年の紅葉は記録的な猛暑だった影響もあってか、全体的に色彩の冴えに乏しく、消化不良な紅葉に終わってしまいました。それでもエリア(山域)によっては昨年もきれいな紅葉に出会うことができました。

タワ尾根(一石山～スズ坂ノ丸)、石尾根、榎ノ木尾根、三頭山北面(奥多摩側)のブナ林など、ある程度標高の高い山域では、昨年もきれいに紅葉してくれる所が多かった感じです。

タワ尾根は昨秋のイベントで歩きましたが、10月ということで、さすがに紅葉にはまだ尚早でした。でも、参加された方々は緑豊かな自然林の森を堪能できたのではないのでしょうか。

写真右は一昨年の紅葉時期のタワ尾根の一隅です。上から11/3、10、17、24と一週間ごとの紅葉の変化・流れです。エリアで見ればある程度の期間見ることが出来ますが、個々の木で見れば見頃は一週間といった所でしょうか。

そして落葉の頃になると足下は見事な落ち葉の絨毯になります(写真下)。鮮やかな色彩の所では踏み込むのを躊躇ってしまいそうです。



観光案内所 スタッフ 堀口 行雄

観光協会事務局より

～ 奥多摩のツキノワグマ ～

奥多摩町は全域がツキノワグマの生息エリアです。昨年は全国的にツキノワグマによる人身被害が多発しましたが、町内で一般ハイカーが襲われたのは10年近く前になります。昨年も町内各所で目撃情報がありましたが、一昨年の方が目撃数は多かった印象です。ツキノワグマと出会わないために、登山をするときには熊鈴を付けるなど、存在を知らせるようにしましょう。

次号発行予定：2024年4月15日

発行 一般社団法人 奥多摩観光協会  
住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210  
電話 0428-83-2152 FAX 0428-83-2789  
編集 名人・達人観光ガイドの会

来さっせえ奥多摩のバックナンバー  
をオンラインでご覧いただけます。



峰谷 標高750m付近(2014.2.23)

今年も、しなやかに楽しく～。

平成26(2014)年の2月8日から15日までの約1週間に2度の大雪を覚えているでしょうか。青梅線は1週間運休。青梅街道と吉野街道は対面通行から一方通行へ青梅駅まで歩く人の姿もありました。小河内地区では積雪が1mを越え、青梅街道が雪崩で不通。町は自衛隊に救助要請を出しました。さらに、大雪処理に対して「雪かきボランティア」の呼び掛けを行いました。上の画像は、峰谷地区で雪かきボランティアの人たちが、救急車搬送を可能とするために除雪作業に向かうところです。当時の高齢者でも未曾有の大豪雪でした。5年後、令和元年(2019)年10月、奥多摩では台風19号による24時間に600ミリの降雨、日原からの鷹ノ巣山ルートなど未だに復旧していません。その後のコロナ感染もしかりです。

今、世界は自然災害ばかりでなく激動の中にあります。名人・達人ガイドの会は奥多摩の自然を愛する人と共にあります。いろいろなことがありますが一括に乗り越え前進したいものです。



## 行って来たあよ

No. 22 11月8日(水)開催  
倉戸山 1169m

秋晴れの気持ちのよい朝、奥多摩駅に集合。倉戸山はそんなに大変なイメージがないだろうが、急登できつところもあるとのこと。私は初めての友の会の登山参加なので気が引き締まる。女の湯バス停で下車するとすぐにスタート。

奥多摩湖に突き出た尾根の急登を速いスピードで紅葉を眺めながら進んでいく。今年の紅葉は夏の暑さで葉が焼けてしまい、色が鮮やかではないそう。くすんだような色合いも柔らかく優しい印象でよいと感じる。途中の休憩地点で1班のガイドさんが、倒木を使ってベンチを作っていた。そのあまりに器用な技に驚く。さらに進み山頂に向かう登山道にはロープが張られていて、そこからはあともう一息。

山頂は平らで広くそこで昼食をとる。紅葉の一番きれいなところはもう少し先にあると聞き、写真を撮りに行った。昼食後、ガイドさんから紅葉やどんぐりについての説明や、健康を維持して登山を続けていくことの大切さなどのお話があった。



下りはさらにスピードが増して走るような速さで降りて行った。参加者の方に励まされながらついていく。最後の休憩は温泉神社。中に貴重な彫刻があるという。機会があれば御開帳の時にまた来てみたいと思った。倉戸口バス停に到着するとすぐにバスが来て、奥多摩駅に向かった。

倉戸山は登山家の山野井泰史さんが熊に襲われた山という印象がありグループで来たいと思っていたが、今回はおかげさまで安心して登山できた。

友の会会員 白川 真理子

No. 24 11月21日(金)開催  
大多摩ウォーキング 8.5km

初冬の奥多摩～古里まで多摩川沿いを歩く。30分程一般道を行き、数馬峡遊歩道に入ると景色も空気も一変。崖の石積みにはイワタバコやウルイ、苔が一面に生え、森閑とした空気が漂う。枝木の向こうに多摩川が見え隠れする。

トンネルの先は数馬峡橋。紺碧の空の下、青く豊かな水を湛える多摩川と、錦に染まる深い渓谷。陽の差し込んだ川面がエメラルドグリーンに輝く。鏡のような水面にその景色が映り、何処までも静かに続く。時間が止まり、絵画の世界。しばしこの深遠な景観を堪能し、鳩ノ巣渓谷へ。



先程までの景色とがらりと変わり、深く切り立った断崖に目を見張るような巨岩奇岩が延々と続く。その間を縫うように勢いよく流れる様に圧倒される。ここは、奥多摩川の中で最もダイナミックな渓谷美を誇るのではないだろうか。その先に、川に突き出すよう

にある大きな岩の上には水神社が祀られてる。周辺の旅館が何軒か台風の水害で廃屋になっていた。ここから多摩川を離れ、双竜の滝、雲仙橋、松ノ木尾根を経て上の滝、下の滝、清見滝、と流れ落ちる滝の雄姿を堪能し、古里駅へ。

太古の昔から、時には優しく時には猛々しく流れ続け、多くの恵みと美しい景観を供してくれている多摩川。どこまでも美しく流れ行く様に、身も心も洗われたような一日だった。

友の会会員 大林 みゆき

奥多摩のむかし話  
釜の滝の竜神様

今年は辰年ですので、奥多摩に伝わる昔話をご紹介します。

日原川釜の滝のつぼには竜神さまがいてここへ管流しの丸太が流れこむと、竜神さまがすみかを荒らされたのを怒って雨を降らせると信じられていました。

管流しが始まるころになると、村人たちは「長雨にならなきゃいいけどなあ」と心配し合うのでした。この滝つぼの難所を通る時は、腕達者なおひょうさん流送夫が選ばれ、竜神さまに作業の無事を祈りながら働くのでした。

ある時、一人の若者がこの滝の隣り山で焼畑作りをしていたところ突然吹き出した強風のため、焼畑作りの火が木から木へと飛び火して、あっというまに山火事になってしまいました。

ところが、若者は何を思ったのか、山火事には見向きもせず一目散に滝の上までかけ下り、腕も折れんばかりに滝つぼめがけて、手ごろな石を拾っては投げ、拾っては投げ、いっしょうけんめいでした。

すると、どうでしょう。滝つぼから黒雲がにわかには湧き出て、たちまちのうちに大雨となり、さしもの山火事もうそのように消え去ったということです。



おくたま昔話 第2集より  
編者：奥多摩民話の会  
代表・荒澤 弘  
さし絵：稲積 幸男

コロナ(2020.2月～2023.5月)  
と東京の山岳遭難

2019年の12月、中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症は、翌年日本にも広がり、4月には7都府県で史上初の緊急事態宣言発令。2020年予定の東京オリンピックはコロナ感染を避け、2021年に無観客で実施。現在も新型コロナウイルスと共生中。

山岳遭難事故件数 2019年、2020年と2年連続の事故減少が続きました。しかし、2021年には一転して2531件(1961年以降で過去2番目)となり、さらに2022年には3015件(過去最多)を記録しています。これを全国都道府県別に山岳遭難件数をみると2021年では東京都は長野県、北海道に次ぐ3番目の多さ、さらに翌年2022年には長野県に続いて2番目の遭難件数を記録。東京都の山岳遭難の中心は奥多摩や高尾山です。

案件内容(2021年・2022年)

「2021年は日本アルプスなどの件数が減少、一方低山、里山などで遭難が急増。新型コロナウイルス感染症の流行鎮静を背景に、身近な山へ出かける人が多くなったことが原因」としています。

遭難者がどのような態様の山岳遭難に遭っているかをみると、圧倒的に多いのが「道迷い」およそ40%、次いで「滑落」と「転倒」がそれぞれ16%、3つを合わせると70%になります。その後に続くのが「病気」「疲労」です。

遭難者の年齢層、圧倒的に多いのが70歳代(約35%)で続いて60歳代(約22%)両者を合わせると55%を超えます。

奥多摩では都心から2時間ほどのアクセスで豊かな自然に接することができます。石尾根や長沢背稜、奥多摩主脈の尾根筋はなだらかで富士山や丹沢山塊、都心の眺めなど魅力は尽きません。しかし、山々の谷筋は非常に深く、急斜面となり多摩川や日原川に落ちていきます。

長野県からやって来た林業関係者の声に耳を傾けてください。「東京の山だから大した山ではないと思っていたら、とんでもない。長野県と変わらない危険がある」。

ガイド 増澤 強